

アダム・スミスから学ぶこと

ー「国富論」だけでなく「道徳感情論」や「法学講義」も読んで、「経済活動とは何か」を考えてみようー

開倫塾

塾長 林 明夫

1. はじめに

おはようございます。開倫塾塾長の林明夫です。今朝も「開倫塾の時間」をお聴きいただきありがとうございます。

ゴールデンウィークが始まりますが、お元気で過ごしていただければと思います。

2. アダム・スミスから学ぶこと

ー「国富論」だけでなく「道徳感情論」や「法学講義」も読んで、「経済活動とは何か」を考えてみようー

(1)今日は、企業経営、経済活動について少しお話させていただきます。経済や経営を考えると、「経済活動として何をしてもよいのか」「会社は何をやってもよいのか」という議論があります。

皆さんは、アダム・スミスの「国富論」を中学校や高等学校で聞いたことがあると思います。これは、国を富ますにはどうしたらよいかが書かれた本です。

自由な競争が一番大事である。各企業が自由に競争すれば、それが非常によい状態で競争が競争を生んで、素晴らしい状態が生まれる。経済も、自由に競争すればするほど自然に調和がとれて、よい状態になるという議論がありました。色々な企業の不祥事が起きる度に、できるだけ自由にやったほうがよいという意見と、もう少し考えたほうがよいという意見があります。

アダム・スミスは、「国富論」の中で、自由にやれば「神の見えざる手」によって経済は素晴らしい状態になる。そして、最終的には国が富み、個人が富んで豊かになるのだという議論をしたと言われています。

(2)しかし、アダム・スミスが書いたのは、この「国富論」だけではありません。アダム・スミスは、「国富論」の前に 2 冊の本を書きました。1 冊は、「法学講義」という法律の授業の本です。そこで、法律とは何かということを一所懸命議論して、経済は法律の範囲内でなすべきだとしたのです。アダム・スミスはとても熱心な方で、本をお書きになり大学でも講義をしました。

「国富論」で、国を富ませるには自由な競争をすれば自然によい状態ができると述べましたが、その前提には法律の範囲内だという枠があるとしました。法律の範囲内で競争をすべきだということです。

(3)アダム・スミスが書いたもう 1 冊は「道徳感情論」という本で、道徳も大事であるということを書いていきます。その基礎として、人間の感情、特に相手が非常に困っている状況とはどのような状況なのかを理解すること・心と心を通じ合わせる事が一番大切であるとしています。

「道徳感情論」は、2冊出版されました。2冊とも、人間の感情が一番大事で、相手の感情を推し測りながら、相手が一番辛い時にその立場に立って物事を考えたり感じたりすることが大切であると述べられています。

- (4)繰り返しになりますが、経済行為は大事で一所懸命仕事をしなければならないが、それは法律の範囲内でやるべきだというのが「法学講義」の主旨です。そして、それ以前に書かれた「道徳感情論」の中では、物事は、相手の立場、中でも一番辛い時の立場に立って考えなければならないことが述べられています。まとめると、アダム・スミスは、道徳を大事にし、相手の感情も大切にして、尚(なお)かつ法律を守りながらするのが経済活動であると論じているのです。

ゴールデンウィークでお忙しいでしょうが、ゆっくり物事を考えることも大事ですので、「経済とは何か」「経営とは何か」を考える時には、一番大切なのが道徳、つまり相手の感情を大事にするということ、次に大切なのが法律の範囲内のプレイだということについて考えていただければと思います。これは、野球やサッカーなどのスポーツと同じだと考えていただければよいと思います。

- (5)先週、教育学博士、経済学博士の小林恵智先生からお話を伺いました。小林先生は、「経営とは営みを経て目的を達成することだ。営みを経て人を幸せにすることが経営だ。」とおっしゃっていました。経済活動は、一人ではなかなかできません。人と人が組み合わさって、1+1が2になる以上のことを目指すのが経営です。そこで一番大事なことは、「人を幸せにする」という目的を持つことだと私も思います。

- (6)先ほどアダム・スミスの話をしましたが、道徳を大事にし、法律の範囲内で、人を幸せにするという目的を持って経済活動をすれば、誰からも責められず、うしろ指を指されることもないのです。立派な堂々とした姿で経済活動ができるのですから、胸を張って行ってほしいと思います。自分の会社のため、栃木県や国のためにお働きになれば、最終的には自分に利益が返ってくると思いますので、そのようなやり方で行っていただきたいと思います。

3. おわりに

ゴールデンウィークなどのゆっくり時間をとれる折りに、アダム・スミスの「国富論」「法学講義」「道徳感情論」などをお読みになられることをおすすめします。岩波文庫などから出ています。よい勉強になると思います。

— 2008年10月23日加筆 —